

## 【エッセイ】

# 学者への道<sup>1</sup>

城生佰太郎

How to make scholar

JÔO, Hakutarô

キーワード：学者、モンゴル語、実験音声学、東京外国語大学、日本  
実験言語学会

私は、今年度限りで本学を去る。2009年4月からの短い7カ年であったが、前任校とはまったく異なる環境の中で、専門分野も異なり、いろいろと刺激に富んだ楽しい時間を過ごすことができた。大学院の言語文化研究科博士後期課程の開設に際してはその一助となり、さらにその中に言語学コースを立てたことも、つい昨日のことのようと思われる。また、わずかな時間であったにもかかわらず、私の言語学コースには3人も学生が入ってきてくれたことも忘れられない。この「お客さん」の数は、他のどのコースよりも多く、単純だが私にとっては嬉しいことであった。

このたび、幸いなことに文学部紀要に投稿スペースができたので、特にこれから教育職および研究職に就く予定のある学生諸君を対象にして、私の半生を綴ることにもいくばくかの意義があると思い、本稿を執筆することとした。ちなみに、現在の私の肩書きは、文教大学文学部教授、筑波大学名誉教授、日本実験言語学会会長、日本音声学会評議員、社団法人日本歌曲振興会名誉顧問、博士(学術)である。なお、フランス語教員免許状を取得している。

## 1. はじめに

私は、東京外国語大学外国語学部モンゴル科を経て、同大学大学院外国語学研究科を出た者である。大学に入学したのは、1965年度であった。小学校から私立暁星学園<sup>2</sup>に通い、すでに12年間をフランス語漬けで育てていた私は、せっかく外語大に入るのなら今まで見たことも聞いたこともない珍しい外国語を専攻してやろうと思い、迷わずモンゴル科を選んだ。もっとも、迷わず選んだもうひとつの理由が、競争倍率の低さにあったことも否めないのだが。

大学の授業は、概して興味を惹かれる講義が多く、とりわけ伊東光晴教授の近代経済学は、名調子の「伊東節」とともに忘れることができない。これと双璧をなすのが、後に生涯の師と仰ぐことになる金田一春彦博士の国語学概論であった。皮肉とユーモアを交えた講義は、これぞまさしく「講義中の講義！」と呼ぶにふさわしいもので、後年教壇に立つこととなった私にとっての講義スタイルのお手本は、まさにこの金田一先生の名講義にあった。また、専攻の授業では小沢重男博士から、モンゴル語学関係の講義を通じて言語学的視点を教授していただいたことも、その後の私にとっては貴重な体験であった。

さらに、小学生のころからどういうわけか映画カメラ<sup>3</sup>と映写機に強く興味を惹かれていた私は、ついに小6で当時大衆機として評判を取っていたヤシカ8Tという8mm映画カメラを父親に買ってもらい、爾来中学、高校を通して超短編のアマチュア映画撮影に没頭していた。ちょうど、大学に入ったころから、アマチュアの世界でも遅ればせながらようやくサイレント映画からトーキー映画への切り替えが進み始め、私も否応なしに自作映画フィルムに音を入れなければ気がすまなくなってきた。そこで必要になったのが、文科系人類であるわれわれにとってはゾッとするような、あの物理学の知識と若干の工学的技術であった。

幸いなことに、後者の技術に関しては生まれつきなのか、物心ついたこ

ろから機械いじりが大好き少年であった私は、まったく苦にはならなかった。しかし、前者に関しては、やはり多少の知識の修得は不可欠であった。とは言うものの、所詮は趣味の世界での修得なので、役に立つ部分さえつまみ食いすれば良いだけの話であったので、さほど苦勞もせずトーキー映画制作に関する基礎的な知識と技能は、自然と身につけていった。しかし、このことが、その後の私の身の振り方に決定的な役割を演じることになるうとは、当の私もこの時点では知る由もなかった。

## 2. 専門との出会い

転機が訪れたのは、3年になった時であった。上にも述べたように、そもそも機械好きで、さらに音響に関するわずかばかりの知識と技術を持っていた私にとって、目を釘付けにするような授業科目名が4月に発表された講義題目一覧の中にあっただ。これぞまさしく、「実験音声学」の5文字である。

担当は吉沢典男助教授であったが、聞くところによると、外大に音声学関係の講座が1講座定員2名として設置されたのは私が入学した翌年に当たる1966年度からのことであり、その直接の要因が1963年から1964年にかけて世間を騒がせた誘拐殺人事件である「吉展ちゃん事件」の解決に向けて、わが外大のスタッフが活躍をしたことによるというのである。これぞ、若き青年であった私の目には、まさに「血湧き肉踊る」といった光景に映った出来事であったことは言うまでもない。

かくて、実験音声学の授業に列席した私は、当時としてはまだ希少であった sound spectrograph (以後SPGと略) という音響解析器材<sup>4</sup>と相対することとなった。しかし、ここに大きな問題があった。それは、当時まだ日本の文科系研究機関では国立国語研究所と東京外国語大学の2箇所にしかならなかつたSPGの操作およびそこから得られた解析データの正しい読み方を十分に指導できるだけの人材が揃っていないということであった。

ところが、一見窮地に追い込まれたかに見えた私を救ってくれたのが、

またまた趣味の力であった。当時クラブ活動として写真部を選んでいた私は、そこでまったくの偶然から顧問をしていた秋山和儀氏と知り合った。秋山氏は写真部の部員たちから親しまれており、通称「ハゲさん」のあだ名で呼ばれていたが、なんと東京理科大学のご出身で、例の吉展ちゃん事件では日本ではじめてという声紋鑑定をおこなって、NHKのニュース番組などで時の人として世間の注目を集めていた人なのであった。

SPGの読み方に関して壁にぶつかっていた私は、ただちに「この人こそ問題解決に導いてくれる最良の先達」と直感し、彼に近づいていった。教官としてではなく、あくまでも教官の補佐という形で、事務職員の身分で奉職していた秋山氏にとっても指導のできる後進が現れたことは、ある意味での生きがいであったように見受けられた。

指導は、まさに徒弟制。理論よりも実践で、おそらく500枚は下るまいと思われる生データと向き合うこととなった。おかげで、SPG上での母音、子音の特徴的な現われがどこにあるのかがほぼ把握できるようになった。卒業論文のテーマも、ここからごく自然に決まり、『モンゴル語母音の実験音声学的考察』(昭和43年度外国語学部卒業論文)へとつながっていった<sup>5</sup>。

しかし、良いことばかりは続かないというのが世の常である。わたしたちも、4年に進級したところで、かの有名な大学紛争に巻き込まれることとなった。大学構内における正規の授業はすべて中止になり、当然研究室への出入りもままならなくなってきたため、SPGを操作することもできなくなった。現在ならば、大学までわざわざ足を運ばなくても、自宅のパソコンに向かいさえすれば初歩的な音響音声学的研究は可能である。しかし、当時は大学の実験室に行かない限りそれは不可能であった。このため、学問にめざめつつあった私にとっては不毛な日々が続いた。

### 3. フランスに専門家を訪ね、学者になる決意を固める

こうした中で、思いもよらぬ方向から援助の手が差しのべられた。前にも述べたように、私は小学校から高校までフランス人のネイティブ・スピー

カーからフランス語を習っていたので、外大にもフランス語で合格していた。そんな私のフランス語力を生かせる場がフランスにあるというのである。

それは、当時パリ大学で実験音声学の授業を担当していた Odette Mettas (オデット・メタス) 教授が、夏休みの間だけ特別に SPG に関する諸問題をめぐって面談をしてくださるという内容であった。これぞまさしく千載一遇の好機である！そこで、次なる問題は渡航の方法に移った。運よく、当時は上智大学が夏季休暇の間だけフランス国内を安価で旅行する計画を立てており、その募集があった。うわさによると、添乗員の仕事を上智大学の外国人教師がつとめ、その代わりにお里帰りの交通費を浮かせるというのが真の目的だったそうだが、要は安価でフランスに行けさえすればよかったので、私はこのツアーに参加することとした。

パリ大学は、夏季休暇の最中であつたので、私は Mettas 教授から指示されていたとおり、パリ郊外にある先生の自宅に電話をかけ、やや複雑な乗り継ぎをして先生のご自宅までお邪魔した。私を出迎えてくださった教授は、中年のご婦人であつたが、開口一番「地球のほぼ裏側から、わざわざ私の家まで訪ねてくださって…」と、私を大歓迎してくださつた。

それから、さっそく本題に入り、私は日本から持参した SPG データ 200 枚余をお目に掛け、あれやこれやと時間のたつのも忘れて SPG 談義に花を咲かせたことは言うまでもない。そうして、このときに学んだことが、それ以降の私にとってはこの上もなく貴重な財産となつたのであつた。

2ヵ月後、日本に帰国した私は、さっそく秋山氏にフランスでの成果を報告し、彼の導きによって日本音声学会に入会し、秋山氏との分担執筆による短い論文を足がかりにして、ついに単著による論文を發表することができた。この段階で、私は大学院進学を決め、学者としての第1歩を踏み出す決意を固めたのであつた。

当時の大学院は、外大では修士課程のみで博士課程は設置されていなかった。この点が現在と大きく異なるところで、学者の道をめざす者は修士号を取得するのが一般的であつて、文系で課程博士号を取るなどということ

はあり得ないことであった。

私は、学士論文の延長線上にあるテーマと取り組み、内モンゴルに分布する方言の中では最大級のチャハル方言をターゲットとして、学士論文で行ったモンゴル国の標準語とされるハルハ方言との対照を試みた。また、母音だけでなく若干の特徴ある子音についても音響音声学的考察の範囲を広げた。このおかげで、モンゴル語にも歴史言語学で従来指摘されてきた「言語傍層 adstratum」の事実が確認された。これらの成果は、『実験音声学上より見たるチャハル方言の一特徴』(昭和45年度外国語学研究科修士論文)としてまとめられた<sup>6</sup>。

#### 4. 学者としての第一歩

モンゴル語科の恩師小沢重男博士のご推薦で、大学院修了と同時に私は外国語学部の教務補佐員<sup>7</sup>に就任し、同時にモンゴル科の非常勤講師を拝命した。いよいよ、プロの学者としての第一歩である。私は大いに張り切り、初めての夏休みには有志学生を募って、幼少時期からの特技であった映画カメラを廻し、本邦初のモンゴル語視聴覚教材を制作した。当時はフィルム代も高価であったため、外国人教師で主演でもあるセベク・ドルジ先生から多額の資金援助を賜ったことが忘れられない。

次の年度からは、上級生対象のモンゴル語学の授業も担当することになったので、服部四郎の『日本語の系統』を参考文献にした日本語系統論の講義なども行った。なお、当時の受講生の中には、現東京学芸大学教授の斎藤純男君や現東京外国語大学教授の小林幸江さんなどがいた。

外大で3年ほどこのような仕事をしているうちに、吉沢典男先生から東京学芸大学で欠員があるからやる気があるなら推薦してあげるといいたいお言葉を賜った。無論、即座に私はやる気満々であることをお伝えし、その後運よく人事の会議を通して、東京学芸大学教育学部の専任講師となった。ただし、ここでの仕事は私がそれまでにやってきたこととはいささか異なり、言語障害、構音障害などと対峙するという内容であった。言

語学や音声学から見れば、応用言語学、応用音声学といった位置づけにあたる内容で、隣接科学として心理学と医学が必須の研究領域であった。

まだ、弱冠28歳であった私は、この未知なる領域への挑戦を興味津々で受け入れた。なんとといっても、給料をもらいながら新領域の開拓ができるのだから、これほどありがたいことはなかった。担当授業科目の中には言語学や実験音声学も入っていたが、週一で医学博士とのコラボで行う「臨床講義」がダントツに面白かった。言葉に障害を持つ児童が臨床外来患者として大学にやってくる。その子の言語行動を一定時間観察・記録し、その後で学部学生、院生、ならびにわれわれ教官スタッフが「ケース会議」と称する議論をするのである。なにしろ、すべてが観察記録されたデータに基づく実証的な研究姿勢で貫かれており、この点が私の行ってきた実験音声学における研究姿勢とピッタリ一致したのがなによりも楽しい理由であった。後年、私は脳科学を援用した「実験言語学」を創始することになるのだが、その土台は後から考えてみるとどうやらこの時期に培われたもののようにであった。

## 5. 筑波大学へ

話は若干前後するが、私は筑波大学ともご縁があって、誕生したでの1974年から言語学概論と音声学概論の講義を担当していた。もちろん、身分は非常勤講師であったが、すでに東京学芸大学の専任講師になっていたおかげで、生活に関する心配はまったくなかった。ただ、東京から優に片道3時間はかかる通勤だけは、ありがたくないことであった。

当時の筑波大学は、教育大紛争の痛手を負っていたために人材面でかなりの苦勞をしていたようで、そのひとつの表れとして、翌1975年度に開設された5年一貫の文芸・言語研究科博士課程では、私が言語学特講の授業担当教官として文部省の設置審議会から承認を受けて教壇に立つこととなったのである。そのとき、私は弱冠29歳であったからこれも今では考えられないことであった。なお、その時点で他に一般言語学を担当した教官は、へ

ブル語を専門とするオリエント語学の津村俊夫講師だけというさびしさであった。

このような状態が5年ほど続いたが、1980年の12月1日付けで、私は文芸・言語学系の専任講師として、学芸大からの配置換えで筑波大学に着任した。これで、ようやく自分の学問が自由にできるようになった私は、まず実験室の整備から着手した。当時としては高額であった音声実験機器の導入である。音響音声学的実験には必須となっていたSPGをはじめとして、生理実験用の器材として調音時における舌と口蓋の接触部分およびそれに要する時間長を瞬時にして計測することができるelectro-palatography、調音時に要した呼気の流量を計測することのできるphono-laryngographおよび鼻腔への気流を計測できるflow-nasalitygraphなどを次々と購入した。幸いなことに、開学後まだそれほど日時の経っていない筑波大学には文部省がいろいろと特別な配慮をしてくれており、そのおかげでこれら高額の器材はそれほど苦勞をせずにそろえることができたのである。

やはり実験音声学の研究にはそれなりの器材は不可欠である。上に述べたような機器の導入によって、筑波大学の音声学は特にアジアの言語研究においてそれ相応の成果を挙げることとなり、徐々にその名を知られるようになっていった。この間、学会活動としては、私は日本音声学会評議員、日本言語学会委員、日本モンゴル学会幹事、などのほか国語学会、日本音響学会、日本フランス語学会、日本認知神経科学会、などに所属して研究発表その他を行った。また、テレビ・ラジオの出演回数もうなぎのぼりに増え、合計して348回にも及んだ。

## 6. 脳波計を設置する

世界的に著名な言語学者の一人にチョムスキー(Chomsky)がいる。彼の偉業に関してはここに述べるまでもないことだが、学生時代にはじめて彼の考え方を学んだときから、私は彼とはまったく意見が合わないことを確信した。とりわけそのなかで、言語獲得装置(LAD)というブラックボックス

スを仮定して、出力情報から入力情報を引き算することによってこのブラックボックスの存在を証明しようとする計算モデル論的説明には大いなる不満を禁じえなかった。そこで、これに対する対案として着想したのが、大脳を実際に調べてそこから何か実証的に引き出せる事実はないかということであった。

研究だけでなく、趣味の小型映画の制作活動も続けていた私は、またまたここでも趣味に助けられることとなった。私たちの所属していた小型映画制作同好会は、以前は銀座ムービーサロン(GMS)とあって、金満家でちょっとインテリなひとたち—たとえば、医者、大学教授、弁護士、会社社長—などが50人ほど集まっていたようだが、私が入会したころはかなり衰退していて14~5人程度の規模となっていた。それでも、私は慶応大学医学部卒で開業医の飯倉重常博士と親しくしていただくことができた。この飯倉先生こそ、脳外科の大先生で、脳科学について何も知らなかった私に脳科学のイロハを教えてくださいました人なのであった。

脳について知るためには、やはりどうしても最低限の脳波実験は行わなければならない。かくて私は「四十の手習い」ということで東京医科歯科大学医学部付属の難治疾患研究所において菊池吉晃博士に、脳波の取り方から波形の解釈の仕方にいたるまでを懇切丁寧にお教えいただくこととなったのである。これは、遠い昔にSPGの読み方に関する手ほどきを外語大で秋山さんから受けたとき、あるいは遠くフランスの地でOdette Mettas教授から受けたときの光景と重なり合うものであった。

こうして、1995年に私は文科系の言語学専攻では日本ではじめて脳波計を設置して、医学や心理学から完全に自立した独自の聴覚実験音声学的研究をスタートさせることに成功したのであった。なお、これらの脳波を用いた言語研究の成果に関しては、城生佰太郎(2006)などを参照されたい。

## 7. 文教大学、そしてまだ見ぬ日々のために

2009年3月31日をもって、私は筑波大学大学院人文社会科学研究科博士

後期課程における専任教授の職を定年退職した。幸いなことに、翌4月1日付けで、今度は文教大学文学部の専任教授に採択された。私にとっては、長い学究生活におけるはじめての私立大学の経験となっただけでなく、所属も日本語教育コースに変わったため、今までのアカデミック・バックグラウンドとはいささか趣を異とする世界に足を踏み入れることとなった。このことは、もはや新鮮な感激を味わうことの少なくなっていたわれわれの年代にとっては久々の刺激的な日々の到来となり、それなりに楽しい時間を過ごすことができたのは、望外の幸せであった。

文教大学は、私学では日本ではじめて教育学部を設置した大学で、どことなく雰囲気的には筑波大学の前身である東京教育大学に近いというもっぱらの評判であった。私としては、かつて筑波大学で同僚であった先生や、かつて筑波大学で私の講義を聴いたという先生が何人もいたりして、それだけでも親しみやすさを感じたものであった。

前任校で担当していた実験音声学と一般言語学は、講義題目名を変えたり内容を調整したりして、大学院の修士課程や博士後期課程でかろうじて教えることができるよう工夫したが、それでも文教大学に着任してからまったく新たに取り組んだ授業科目もいくつかあった。

また、文教大学に奉職したおかげで、日本語教育というのは原則として日本語をまったく知らない人たちを対象とする実学であるという認識を強く持つに至った私は、着任してから新たに2冊の入門書を書き下ろした。それが、2012年に出版された『日本語教育の音声』と『日本語教育の語彙』であり、いずれも以前に何冊か専門書を出版している勉誠出版から刊行した。もしも、文教大学に赴任しなかったら私はこのような本を書くことはなかっただろうと思うので、私にとっても新境地開拓となり、大変にありがたいことであった。

学会関係では、現在私は自分自身で創唱した実験言語学を表看板とする日本実験言語学会の会長を務めている。まだ創設して8年ほどの若い学会だが、理論言語学の対極にあって実証的研究姿勢を貫き、以て理論の見張

り番的使命をはたすべく会員諸氏ともども頑張っている。また、そのほかにも日本音声学会評議員、社団法人日本歌曲振興会名誉顧問などを務めている。

来年度から、私は非常勤講師として、構音障害や言語障害など言語に障害を持つ患者と向き合い、その診断や治療に参与する言語聴覚士(speech therapist、略してST)の養成を目的とする教育機関で音声学を30時間分教える。病院の付属機関なので、管轄は文部科学省ではなく厚生労働省である。また、全員が国家試験を受験する予定なので、授業に臨む態度が大学とはまったく異なる。したがって、内容も文教大学よりは高度なことを扱う。

今後ますます高齢化社会に拍車がかかって行く日本の現状を考えると、このような仕事はまことにトレンドイであり、また意義深いものとする。

音声学や言語学は、いわば応用音声学、応用言語学として、このような分野でも立派に社会貢献をしている。こうした脈絡の中で、私も微力ながら新たな気持ちで今後とも後進の指導をおこなって行くつもりである。

## 8. 結び

以上に述べてきたように、私の人生は趣味に助けられることが多かった。このことを、現在の視点から改めて考えてみると、やはり人生にはなんらかの情熱が必要だということにほかならない。なにかを極めようと思う気持ちが、積極的な行動力となって表面に現れ、その行動力が他人を動かす。一見、信じられないようなこの連鎖反応が、大きな成果となって人生を潤してくれる。

まさに、正の連鎖的循環とは、このようにして自己の内部から湧き出るものなのである。今の私は、そのように考えている。

### 【注】

- 1 本稿は、本学の文学部紀要第29巻2号に大幅な辞退者が出た関係で原稿の本数が激減したため、文学部の紀要編集委員会委員長としての立場上、穴埋めとして急遽投稿したものである。

- 2 1888年創立のカトリック系ミッション・スクール。フランス語教育とフランス文化に根ざしたサッカー教育を特徴とする。ただし、現在ではフランスの弱体化により、フランス語教育は大幅に後退している。
- 3 映画関係者の間では、静止画撮影用の機材を「カメラ」といい、動画撮影用の機材を「キヤメラ」という習慣があった。
- 4 工学系の専門用語では、強電系に対して「機械、機材」などを用い、弱電系に対しては「器械、器材」などを用いるという習慣がある。
- 5 この研究内容は、その後1996年度の文部省科学研究費補助金「研究成果公開促進費」の交付を受けて、他の8本の論文とともに『実験音声学研究』（1997年、勉誠出版）として公刊されている。
- 6 この内容の一部に関しては、城生佰太郎（1973）で公にされている。
- 7 現在で言う「準研究員」である。

#### 【参照文献】

- 城生佰太郎（1973）「チャハル方言の /t/ と /d/ に関する一考察」『LEXICON』2:28-38. 岩崎研究会
- 城生佰太郎（1997）『実験音声学研究』、勉誠出版
- 城生佰太郎（2006）「実験音声学の研究方法」『実験音声学と一般言語学』:52-60. 城生佰太郎博士還暦記念論文集編集委員会編、東京堂出版
- 城生佰太郎（2012a）『日本語教育の音声』、勉誠出版
- 城生佰太郎（2012b）『日本語教育の語彙』、勉誠出版